

海は見ていた

馬鳥貴代美

この高級老人ホームは、潮騒の届く距離にある。

私が、入所してから三度目の夏が来た。

二十年前に六十歳で亡くなった夫がかなりの資産を残してくれたので、それを信託していた。お金の心配はなかったが、子どもには恵まれなかった。

私はもうすぐ、七十歳になる。

昼食を済ますと、談話室のソファに体を沈めて、カモミールティーの運ばれてくるのを待っていた。そこへ、見慣れぬ女性が声をかけてきた。歳は四十前後だろうか。

「いい天気ですね。お庭を散歩したら気持ちいいですよ」

「あなたは見かけないけれど、どなた？」

「一週間前に栄養士として、こちらに赴任してきました。よろしく」

その女性は、しっかりした体つきと柔らかな物腰で、私はすぐに気に入った。

「そうね、海でも見てこようかしら」

海までは、私の足で七、八分くらいかかるだろう。

「ちょうど休憩時間だから、わたしも一緒に一緒させて下さい」

女性は私の承諾など、気にしていない様子で、こちらとしても断る理由も見当たらなかった。

女性は、「海に行く」と告げてくる」と受付へ行き、すぐ戻ってきた。

私たちは国道を渡り、松林の小道に入った。

そこからは、絵葉書のように小さく切り取った海を臨み、それは近づくにつれ広がりを見せていった。砂浜に出ると海は大きな姿を現した。

海開きになったばかりだったが、この辺りは遊泳禁止なので、釣り人が疎らにいるだけだった。弓なりになった波際の彼方に、いくつものビーチパラソルが夏を装っていた。空には、厚い入道雲が湧いていた。

日傘を手にした二人の顔だけが、影の中にあっただ。浜昼顔が這う上に腰を降ろすと、海風が心地よく、薄い花びらは微かに震えた。打ち寄せては消える波の音だけが、規則正しかった。

私は、隣に座っている栄養士だという女性に視線を向けた。ふっくらした顔立ちは安心感があり、利発そうな目の動きは信頼を寄せるのに十分だった。

私の方が明らかに歳上なのに、彼女は甘えさせてくれる雰囲気を持っていた。会った

ばかりの人にそんな感情を懐くなんて不思議だ。

私は、海に目を向けたまま話しかけた。

「昔から同じ夢をよく見るのよ。波に追いかけられる夢なの。この砂の上に手をかけて這い上がり、もうすぐ逃げ切れるというところで砂が崩れて、波にさらわれ目が覚めるの」

「由紀さんは、この近くの生まれでしょう？ 海には慣れているはずなのに、どこかで恐れていたのかしら」

私は、その言葉に驚いて彼女を見た。

「あなたは、わたしの名前を知っていたの？ それに、この近くに生家があったことも」

「ええ、存じ上げていますし、もっと知りたいと思っています」

「こんなわたしのことを知っても、何にもならないわ」

そう言いながらも彼女に親近感を覚えた。

「由紀さんは、わたしが知っている人の中でも、数少ない幸せな人よ。お金持ちの男性と結婚して、なに不自由ない暮らしをしてきたんですもの」

彼女は眩しそうに目を細めて、風で乱れた前髪を手で押し上げながら言った。

私は、どんな返事をしたらいいものか、わからず黙ったまま海に目を向けた。

人はうわべの情報だけで、簡潔に判断するものだ、まただからと言ってそれを咎めることもできないと考えていた。

沈黙が続いたが、彼女は苦にならないようで、時折私に、にやかな表情を見せていた。

沈黙を破ったのは私だった。

「ねえ、あなたは若い頃を懐かしく思い出すことあるかしら？ 青春の頃を。人生で一番輝いていた頃を。その頃の思い出は宝物よね」

「思い出は形にないものでしょう。それが何よりも価値があるなんて、わからないわ」

「あなたが今言った幸せというのは、経済的なことでしょう。それは否定しないけれど」

「もしよかったら、宝物を話してくださいさらない？」

「でも、話したら消えてしまわないかしら」

私が、子どものようにふざけて言うと、

「最初から形がないんですもの。消えても誰にもわかりませんよ」

彼女は楽しそうに言った。

「そうね、他人にはね」

私の心から、あの頃の大切な思い出が消えてしまったら、私の人生に救いはない。彼女の携帯電話が鳴ると、何を話していたのか聞き取れなかったが、

「先に戻りますね。明日また同じ時間にここで会いましょうね。お話の続きを聞かせてくださいね。由紀さん、約束ですよ」

そういうと、急いで帰ってしまった。

彼女の最後の、「約束」という言葉が心地よく響いた。気おけない学生時代の友だちのようだった。

小柄な私は、オーダメイドのワンピースに身を包んで、自分でも上品な熟年のつもりだった。

私は、この故郷にある老人ホームに入所できたことに満足していた。新しい家々が立ち並び閑静な住宅街へと変貌していたが、道は変わらなく懐かしい。子どもも兄弟もない私は、十年前にこの老人ホームが出来たときから、ここに入るのが夢であり、ここを終の棲家と決めていた。それを手にすることができた喜びは大きかった。だが私は、それを手に入れたと同時に、苦悩も手に入れてしまった。拘泥に心を奪われ、それが今の満足した暮らしに陰を落としていることを残念に思っていた。

私は、ホームに帰ると夕食にフレンチを予約した。今夜は、中華と和食とフレンチの三種類から選べるのだ。夕食まで、まだ時間があつたので、部屋へ戻りベランダに出た。期待した風はなかった。風は松林の底で暑い日差しから、身を守るように微動だせずいるようだ。私は、お風呂に入ることにした。

温めの湯に浸かり、拘泥から解放されない哀れな自分の心を追った。

それは、私が高校生のとことだ。美しく清らかな青春時代だった。人生において大切なものとは、本当に僅かなものなのだ。私の人生その三年間だけでいくらいだ。なぜ、そんなにも美しかったのだろうか。

それは、自分の心が美しかったからだと思う。時を経て、美しい心そのままでは生きていけないことを悟り、心を汚す術を学んだ。世間に同化して成長したつもりになったのだ。潔癖さは薄れ、大人の理不尽さを憎くんでいたはずなのに、いつしかそんな感情は邪魔になつていた。

何故、私の心はその清らかな過去にだけ執着してしまうのだろうか。その後の人生が真逆だったからだろうか。

幸か不幸か、追憶に浸るには私の時間は何時でもたっぷりあった。

思い出すことは、雨上がりの日の、学校から駅に続く道に漂う植物の匂いとか、礼拝堂の窓から差し込む光と影とか、駅の改札口で賑わう学生たちの革靴の音とかだった。

それに、亮くんというボーイフレンドのことも思い出さずにはいられない。

私はそうした高校時代の記憶を愛しく思っていた。

ホームの一階のレストランに入ると、プールの見えるテーブルに席を取った。ピンクのテーブルクロス、中央に欄の花の部分だけが、ガラスの平たい水盤の中にいくつも浮かんでいた。プールは周りの松の庭園とライトアップされ、青く水面は揺れ、非日常的な表情をしていた。

男の人が一人泳いでいた。殆ど、しぶきのない綺麗なクロールだった。

「ご一緒してもいいかしら」

顔見知りの元女優さんが声をかけてきた。

「どうぞ」

美しい元女優さんが坐ると、私のテーブルは一気に華やいだ。

「私、コーラス部に入っているのよ。あなたも入らない？」

彼女は言った。私はコーラスには興味が湧かなかったが、愛想良く彼女の話に相槌を打ったりしていた。

栄養士のあの彼女は、厨房にいるのかと気になったが、明日の約束があったので、それを思うと心が弾んだ。

次の日、昼食を済ますと外へ出た。

このホームは病院の跡地に建てられたものだ。その敷地面積は、近くの中学校と同じくらいでかなり広い。玄関から門までは百メートルくらいの距離だが、その周辺は庭師の造った格調高い庭園の姿ではなく、私が子供の頃から見慣れている自然を、残しながら手を加えたものだった。

玄関の正面には山桜が一本、堂々と構えていた。白い花が咲くと、この辺りに静謐な空気が漂う。元々の地形の丘陵が、波の背のように幾重にも連なりその上には芝生が青々としていた。その中に山百合がぼつぼつと自生していた。松の木も手入れがされて、枝はどれも北へと、傾いていた。

左手に進むとホームのロビーになり、右奥の小さな窓をいくつも付けた洋館は事務室になっていた。洋館は戦後すぐ、駐留米軍のために建築された物だった。車道だけが舗装されロビーの車寄せまで続いていた。

私の足取りは軽かった。

彼女はまだ来ていないようだった。鳶が数羽、上空を旋回し一瞬、頭上が暗くなった。私の持ち物を探りにきたようだ。

砂の上に腰を降ろすと、水平線に目をやった。背後から来るはずの彼女に、私の意識は背中に集中していた。

すると、誰かが後ろから両手で私の目を覆い隠した。

すぐに、彼女だとわかりその両手に触れると、柔らかい感触に親しみを感じた。

「おまたせ」

声は明るかった。

私は、この人に日頃、自分の心を占領している厄介な気持ちを話したくなった。

「私は今、とても優雅な生活をしていると感謝しているけど、高校生の頃のことばかり思い出しては悲しくなるの」

「由紀さんは今こんなに幸せなのよ。これ以上、何を望むというの」

「そうね、確かに。でも変な別れ方をしてしまった亮くんに会いたいというのも叶わないことかしら」

私は独り言のように呟いた。すると彼女は言った。

「亮くん？ 苗字はなんていうの？」

「それがどうしても、思い出せないの」

「宮沢っていうんじゃない？」

「判らない。思い出せない…」

と言ってから、私は驚いて彼女を見た。

「適当に言ってみただけですよ」

彼女はそう言って笑った。

「高校生の頃のことばかり思い出すと行ってたけど、卒業してからはどうしてたの？」

私は何から話したらいいか考えた。

「高校三年に進級してすぐ、父が亡くなったの。父はアルコール中毒で体を病んでいた。いつもお酒を飲んで夫婦喧嘩が絶えなかった」

家庭の不幸は子どもを私をすぐに巻き込んだ。兄姉はなかったの、学校を卒業したら、父の代わりに働いて家計を助けるという使命が私に与えられた。それまで、母のパートで糊口を凌ぐしかなかった。

ある日、母は卒業してからの、私の就職先をみつけてきた。

「由紀、心配ないよ。私の従妹が経営しているクラブだからね」

私は卒業すると一般企業に就職することもなく、水商売の道に入ったのだ。

学生から、いきなり水商売に入ることにその当時、抵抗がなかったかと問われれば、なかったと思う。早く自立してこの家を出たいと、常々考えていたから。だが、今それを後悔している。痛烈に後悔している。母の進める道になんか従わなければ良かったと。直情的な母が好きではなかった。だが母は給料の半分を出す私に満足して、以前より優しくなった。

「そうなの。それで亮くんはどうなったの？」

彼女は亮くんのことを忘れていなかった。

彼と出会ったのは、私が高校一年の夏休みが終わった頃、帰宅の電車のなかだった。電車は空いていたが私はドア付近に一人で立っていた。乗車して二つ目の駅に停車したとき亮くんが乗ってきた。私と目が合うと彼は躊躇せずつかつかと私の前に現れて、

「可愛いね」

そう言う私の髪を触った。突然のことに驚いたが、恥ずかしくてなるべく平静を装った。彼も高校生だった。

どこの高校？ 名前は？ 電話番号教えて。

亮くんは時間を無駄にせず、肝心なことを立て続けに質問してきた。それには彼が次の駅で降りるからというのが後で分かった。

彼の見かけは悪くなく、私は素直に答えた。それに、いつもと違うそんなハプニングが嬉しかった。私は今でもそのときの、平和で明るい午後の日差しが、車内に伸びていたのを覚えている。私の高校は私立の女子高だ。ミッション系で校則は厳しかった。それでも女子高は楽しい。男子が居ないぶん開放的で自由がある。我が家の貧しい経済事情では、私立の高校は無理だったが、幸運にも祖母が学費を出してくれたのだった。

次の日、亮くんから電話がかかってきた。私は彼の住んでいる街まで電車で行って、二人で喫茶店に入った。彼は慣れた感じで「ここに入ろう」と言い、すすい階段を上がった。

喫茶店に初めて入った私は、その照明の薄暗さに緊張した。

私たちはコーヒー一杯で三時間くらい居ただろうか。

初対面に近いというのに、話は弾み楽しく、時の流れを忘れていた。

だが、話の内容は思い出せない。ただ、楽しかったという事だけが心に残っている。

亮くんは私より一学年上だった。

「その人に逢いたいの？」

彼女は言った。

「うん。逢えたらいいわね。やっぱり逢わないほうがいいかな」

「きっと、もうおじいちゃんよ」

「私だっておばあちゃんよ。ただ、あの頃の話をして、もう一度、二人で笑いたい」

彼女は沈黙したまま俯いた。私は、変な事を言ったかと、思ったが話を続けた。

「でも、私なんかそんな事いう資格ないわね。最後に彼に酷いことしまったんだもの。あの頃の自分が理解できない。あの記憶を修正できたらいいのに」

「由紀さん、人はいつでもなりたい自分になれるのよ。元氣出して」

「そうね。今ある自分も、自分が作ったんですものね。だから変えることも出来るはずよね」

彼女に微笑んだ。

「明日また、ここで会いましょうね、約束よ」

彼女の言葉に、私は幼子のように喜んだ。

ホームへ戻ると、きょうは囲碁教室があるのに気づいて娯楽室へ行った。もう、気分は平常に戻っていた。

女性は私一人だけだったが、一週間に一度のこの日を楽しみにしていたので、男性たちの仲間の一員に喜んで加わった。

囲碁の先生と新しく入部した男性の勝負を見ていたら、ふと栄養士の彼女の名前を知らないことに気づいた。私は厨房に向かい顔馴染みの職員に、

「最近、入った栄養士さんの名前教えていただけませんか？」
と言った。

「F市から通っている方ね。あの方は、宮本さんですよ」

と気軽に返事が返ってきた。

私は部屋に戻り、職員の言葉を反復していた。「F市の宮本さん……」そういえば亮くんもF市だったつけ。よくF市には行ったなあ。その時、あっ、と叫び声が出た。亮くんの苗字を思い出したのだ。

「宮本だ！ 宮本亮くん！」

数年前までは覚えていたのに、いつの頃か思い出せなくなっていたのだ。

次の日、彼女との約束を果たすため海に向かった。

珍しく彼女、宮本さんは先に来ていた。その後ろ姿が目に入ると、早くそばに行きたくて急ぎ足になったが、気持ちと足が揃わず、砂に足を取られては何度も転びそうになった。もうここまで来れば声が届くかも、と思い大きな声で名前を呼んだ。波が私の声をかき消した。荒い息を吐きながら言った。

「宮本さん」

隣に座ったときには疲れ果てていた。

「由紀さん、大丈夫？」

「宮本さんですね」

呼吸が整ったところで言った。

「ええ、まだ教えてなかったかしら」

気まずそうな顔をした。

「亮くんも宮本だったのよ。もしかしたら知り合い？」

彼女は少し間をおいてから語りだした。

彼女は宮本明子と自己紹介をした。亮くんの長男の嫁だということだった。

「ごめんなさいね。由紀さんのことは、義父から聞いていたの。でも、ここに入所しているのは知らなかったのよ。名簿を見て、この人が義父の初恋の人ではないかと思ったの。そしたら、やはりそうだった。義父の魂がここへ導いた気がしているわ」

こんなに興奮したのは何年ぶりだろうか。私の心臓の鼓動が、彼女、明子さんに聞こえてしまいそうで胸を抑えた。

「魂って、なに？」

「義父は三年前に亡くなったんです」

私の手からアップルティーのボトルが、砂の上に音もなく、ゆっくり落ちた。この世のすべての音が消えた。体中の力は抜け、もう砂粒さえ掴めない。

枯渴した涙腺からは、それでも水蒸気のような涙が幻のように湧いては消えていった。それは悲しみというより絶望だった。

亮くんは臍臓がんに罹患し、医者のがん告知から三ヶ月後に人生の幕を閉じたそうだ。「自分の、先の短い命を知った義父は、由紀さんのことを私に話してくれたのよ。私だけにね。由紀さんとの最後のことも話してくれた。由紀さんのこと忘れようと努力した、と言っていました」

明子さんは、私から目を離すと続けた。

「最初軽い気持ちで声かけた女の子なんだから、あの時、出会っていなかったんだ、と思えばいい。あの電車に乗ってなかったんだ、と思えばいい、と自分に言い聞かせたと……」

学校を卒業してから、亮くんからもらった手紙にも同じことが書いてあった。私は何故、その時、亮くんの切ない胸の内を知ったのにも拘わらず、手紙に心が動かなかったのだろう。すぐ電話しようと思わなかったのだろう。解らない。はっきりわかることは、嬉しいとか悲しいとか、何も感じなかったということだけだ。

あの頃は何に対しても、心が不感症になっていた。考えるということを放棄していた。亮くんとの最後の日、それは清らかだった自分と決別した日。

高校卒業が近づくと、私は亮くんと連絡を取らなくなった。

彼は大学生になっていた。

高三の冬、学校から帰ると、家に見知らぬ男がいた。

母とその男を挟んだテーブルには、お酒が並んでいた。私は、咄嗟にその場に嫌悪を感じた。母は微醺を帯びた顔を私に向けると、職場の同僚だと紹介した。母より明らかに若かった。その男は、私を値踏みする目つきでじろじろ見た。

母は私の結婚相手としてどうか、と言った。

「冗談でしょ！ まだ高校生よ」

私は怒った。

「もちろん結婚は、先の話だけど。市田さんは、お前のこと気に入っているんだよ。婚約くらい、いいんじゃない」

男は何も言わなかった。鼻が異様に大きくて、酒のせいか、その鼻は赤い。私は、全身鳥肌が立ってきた。髪の毛も総毛だった気がした。

「そんな、おじさん死んでも嫌よ！」

私は家を飛び出した。

亮くんに電話をして、F市の駅前の公園で待ち合わせをした。

亮くんは私の顔を覗き込んで言った。

「由紀、どうしたの？ 泣いていたの？」

「泣いてなんかいないわよ。どうして？」

「目が赤いし、腫れているよ」

「ああ、これはさつき、悲しい小説を読んだからでしょ」

「由紀を泣かせる本なんて僕も読みたい。貸して？」

「駄目よ、女の子の読む本よ。それより寒い。亮くんのそばにいてもいい？」

彼は、私の肩を抱いて引き寄せた。自分のマフラーを取って私の首に巻き、冷たい私の両手を握りしめ、息を吹きかけた。

私は夜空を見上げた。童話に出てきそうな、黄色い三日月が今にも揺れそうに浮かんでいた。

「由紀、何を見ているの？」

亮くんも上を見た。

「流れ星を探しているの」

「願い事はなに？」

「たった今、世界が終わりますように。亮くんのそばで」

亮くんの手が、優しく私の頭を包んで自分の胸に引き寄せた。

私は思った。この人は私とは住む世界が違う。私が、今日の出来事を、正直に話しても理解できないだろう、と。

その後、結婚話は立ち消えた。地主の長男とか言っていたが、母の計画は、クラブ勤めに方向転換したのだ。私もその方が良かった。

そんな事があつた数日後、亮くんの家に招かれた。彼の両親が私の周辺調査さながらに、あれこれ質問してきた。それで結局、あんな家柄の子はやめなさい、ということになったのだ。そんなこともあつて私としてはどうでもよくなっていた。亮くんのお父さんは大企業の重役で、お母さんは絵に描いたような良妻賢母型の上品な人。私の両親とは月と蝋。私は、どこかで潮時を考えていたのかも知れない。これから水商売に入ったら金持ちの男を騙してやる、くらいに思っていた。

亮くんから電話がきても居留守を使い、手紙がきても返事を出さなかった。すると、ある日突然、亮くんが私の家を訪ねて来た。それは私がクラブに努めはじめて、一ヶ月くらい経った頃だと思う。

「由紀ちゃん、いますか」

亮くんの声が聞こえた。私は驚いた。一瞬憎悪が湧いた。私をほっという欲しかった。母に、追い払ってくれるように頼んだ。

「なんでもいいから、もう二度と来ないように追い返して」

そういう役は、この母にとって適役だった。

「うちの娘は、男をつくってどこか行ったよ」

母は若い男の反応を伺いながら、くわえた煙草に火を付けた。これ以上、下品な人を探すのは、難しいだろと思われた。母にしても目の前の若い男と娘が同棲でもされたら困るのだ。私の給料半分、という収入が無くなるのだから、死活問題なのだ。

「連絡取りたいのですが」

「そんなことして、どうするの？ 家出なんだから知る訳ないでしょ」

「一度、本人と話がしたいんです」

「あの子は、あんたが考えているような純情な子じゃないんだよ。あんたもたぶらかされただろう。目を覚ましなよ」

同伴してきた亮くんの友だちが、これ以上彼が傷つくのが、耐えられないとばかりに、

「なあ、もう諦めろよ」

と、繰り返した。

俯いてじっとしている亮くんの手には、小包があるのを見ると、母は言った。

「それ、由紀に渡すために持って来たんなら、預かっておくよ」

「じゃあ……」と亮くんは言つて、母に小包を渡した。

「これを、由紀ちゃんに渡ししてください」

二人が帰って行くのを見届けてから、母のところに行った。戦利品を手にした勝者のように、小包を勝手に開けようとしている母の手から奪い取った。その足で海に走った。砂浜に腰を下ろすと、ゆっくり小包を開けた。レコードが一枚入っていた。

それは、二人の想い出の曲、ピーター・ポール&マリーの「虹と共に消えた恋」だった。私の涙はもう止まらなかった。

「亮くん、ごめんなさい」

なぜ、人はこんなな苦しむのだろう。もう恥はたくさんだ。この海で死にたい、と思った。亮くんと、この海に何回か来たことがある。そこで、彼が「虹と共に消えた恋」をギターで弾いて私が歌って、楽しかった。

それでも私は涙を振り払って、過去に決別しなければ、と強く思ったのだ。その時の私に、「バカ！ そうじゃないでしょ！」って言ってやりたい。

明子さんは、

「由紀さん、手に届かないものを追いかけるのは、精神的な消耗を招くだけよ」と言った。

「そうね。精神的な美しいものはお金では買えないしね」

私たちはホームに戻った。

私がクラブに勤めてから、しばらくするとママが言った。まだ客待ちをしている時だった。

「由紀ちゃん、この商売していると男を見る目が肥えてくるでしょう？ 金もない地位もない男になんか、引っ掛つたりしっちゃ駄目よ。この世界で、男を土台にしての上がつていくのよ。愛だの恋だの言う男は必要ないの」

と訓示を垂れた。確かに私は、この仕事に就いて、男という生き物に驚かされたことは事実だ。高級なスーツに身を包んだ紳士もお酒の量が増していくうち、卑猥なことを平気で口にしたたり、ホステスの体を触りたがる客も結構いる。水割りを作っている間に、胸に手を入れてきたりするのだ。「悪戯な手ね」と言っつてそつと取る。それが、だいたいい世間でいう地位の高い職業の人だったりするので。

「昨夜は先生に乳房を触られて過ぎて痛くて。きょうはお手柔らかかにお願いしますよ」と苦言を呈すると、

「記憶にない。覚えていないとは、勿体ないことをした。ハハハハ」

敵もさる者、平然と言う。記憶にない、とは便利な言葉だ。

新米ホステスの頃、客から頬に平手打ちをくらったことがあった。私は痛さと屈辱で

泣いて、黒服に愚痴った。それは、仕事を終えて駅へ向かって歩いているときのことだった。

すると、黒服は、「ぶたれるホステスが悪い」と言うではないか。「そんな事言うあんたなんか、嫌い！」私は声を出して泣き出した。道行く人たちの怪訝な視線に、黒服は困惑の色を隠せなかった。そして、私を黙らせるのに、こう言った。

「由紀ちゃん、明日フリーの客が来たら、つけ指名するから」

「ほんと？」

「本当だよ。だから明日休まず出勤するんだよ」

それから数年して黒服の、その時の言葉の意味が分かった。

接客業とはいえっても、客に一目置かれるようにならなければいけないのだと。客に認められていた自分を反省しなければいけない。

歳の若かった私は大多数の客から、女として相手にされなかった。

「まだ、ケツが青い」などと言われ、「見たことあるんですか！」と言い返してくれたものだ。その当時の客は若い女より、客あしらいが上手な大人の女を好んだように思う。ホステスたちと会話を楽しむために来るのだから、当然かも知れない。

私を指名してくれる客は若い人ばかりで、中年のお金を沢山使える人に、何とかして鼻屑にされたかった。

教養を身に付けようと、まず万葉集のテキストを買って勉強したりした。

昼間、仕事をしているビジネスマンなどを見かけると、しみじみ思う。

「あんまりっぱな仕事をしている人たちも夜になると豹変するのだろうなあ」

たまに高校時代の友だちとランチなどすると、彼女たちの話は無邪気でいいな、と思う。会社の上司の誰々さんは、仕事が出来てカッコいい、とかあんな人なら不倫してもいいとか、キヤーキヤー言っている。

「その上司や男たちは、昼の顔と夜の顔を持っているのよ」

私が言うと、

「なに大人ぶっているのよ」

なんて、全然相手にしないのだ。

ホステスになってから恋もしたけれど、それは生きてゆくための恋だった。

だが、今の私はママの言うように、男を見る目が肥えなくては駄目よ、という意見に共鳴しているわけでもない。何も疑わず綺麗な心で一人の人を一生愛していったらいい。それを乙女の頃に思うのではなく、今になって思うのはなぜだろう。今思っても似合わないだろう。本当に大事なものは僅かだ。

明子さんの話によると亮くんは、こんな私をずっと思い続けてくれたらしい。

「明子さん、なぜ最初に亮くんのこと話してくれなかったの？ 息子さんの嫁と言わなかったの」

と訊いた。

「そうね。まだ義母が健在なので…」

「ごめんなさい。いいのよ、話してくれてありがとう」

目の前の海と空が世界を二分していた。空は気づかれないように少しずつ色を変え、海は飽くことなく白波を立てていた。あの日のように。ヘリコプターの騒音が鳶の鳴き声を掻き消した。

「あら、もうこんな時間なの、あつという間に時間が過ぎたわね。帰りましょうか」

明子さんは時計を見て言った。私は、

「少し散歩してから帰るわ」

と言い、駅方面に向かって歩いた。

亮くと、入ったことのある喫茶店の前で立ち止まった。この店はこの辺でも老舗だ。ケーキの並んだショーウィンドーを覗くと、サバランに目が止まった。亮くんこの店で食べたことあったなあ。このサバランは、スポンジの底に甘いラム酒が、零れんばかりに満ちていた。その時、私は、ラム酒で火照った顔を彼に向けて、言った。

「胸がドキドキする」

「酔ったの？」

「ううん。亮くんにドキドキしているの」

「あー、やっぱり酔ってる」

そんな事を思い出していた。そして、店内に入りサバランとコナコーヒーを注文した。窓から見える街路樹の葉が、頼りなく揺れていた。歩道をゆく人々は、窓辺にいる私に何の興味も示さず行き過ぎる。こんなに多くの人がいても、私とは無縁以外の何者でもない。

次の日、いつもの時間に海に散歩に出た。

明子さんは少し遅れて来た。

私は亮くんとの思い出を話した。脈絡のない思いついたことを、あれこれと話した。二人で、よく行く喫茶店があった。その店にジュークボックスがあつて、確か百円で三曲かかったと思う。私はよくジェファーソンの「あなただけを」をかけ、彼は「ストップミュージック」をかけた。三曲目は二人でじゃんけんして勝った方が選曲した。亮くんが大学生になると、グループで遊ぶようになった。彼の友だちも彼女を連れて

きて、四人でよく踊りに行った。楽しかったなあ。バカ騒ぎをしては笑い転げた。

江の島にも遊びに行った。二人は木立の下で話をしていた。お互い読んだ本の感想など語っていたのだが、仲良しのいい雰囲気に見えたらしく、近くの食堂の窓から大人たちが顔を出し、「まだキスをしないのか」と冷やかしてきた。私の頬は真っ赤、亮くんは私の手を取り二人で逃げた。一息ついたところで亮くんが私の顔を両手に挟んで、キスをしようとした。私にとっては初めてのことに。咄嗟に拒んだ。その後は、二人とも何事もなかったように、土産物店が両側に並ぶ坂道を楽しく散策した。夕方、亮くんは私の家の近くまで送ると言った。

「あの信号の所で、さよならだね」

私は指さしながら言い、彼は小さく頷いて、

「淋しいね。もっと一緒にいたいね」

と言い、私も、

「うん」

と、亮くんの腕に、もたれかかりながら言った。

信号が青になるのを待った。夜の帳が辺りを包みはじめ、二人に別れを促した。

私は亮くんの手を握った。

「今日はありがとう。また江の島行こうね」

信号が青になると、私は背伸びして亮くんの頬にキスをして、横断歩道に向かった。途中、振り向いて手を振った。彼も手を振った。渡りきると、私は更に両手を振った。亮くんの姿が闇に溶けてしまうまで見ていた。すると、目頭が熱くなった。亮くんのキスを拒んだことで、少し感傷的になっていたのかも知れない。このまま、家に帰るのが虚しい気がしたが、とぼとぼと帰路に就く。

亮くんとファーストキスは電車の中だった。江の島に行ってから間もなくだったと思う。学校の帰り二人は待ち合せて、書店まで参考書を買に行った。亮くんが高校二年のときだった。帰りの電車に乗ると少し混んでいた。それで、私たちは貫通扉の中に居場所を見つけた。足元がぐらぐらして、私は亮くんの腕につかまった。彼が私を守ろうとして肩を抱いた。私の胸は震えた。それでも、私にはもう心の準備が出来ていた。私が話している間、明子さんは私の手を握っていたらしい。私が立ち上がるようにすると、彼女は先に立って私の手をとってくれた。

明子さんの素性が分かってからも、以前と同じ親しみは変わっていないかった。

それから何日か過ぎ、明子さんは久しぶりに私を海に誘ってくれた。

「由紀さん、お体変わりない？」

「ありがとう。この通りよ」

「実はね、義母が転んで骨折し歩けなくなったの。持病もあるし、仕事辞めて介護することになったのよ」

「そうなの。義母さん、お気の毒に。でも辞めてしまうなんて残念だわ」

「時々遊びに来ますよ。だから元気でいてね」

それが明子さんとの最後の会話だった。

今日は蒸し暑い日だ。それでも、日傘をさして海辺を散歩すると風が気持ち良かった。今まで旅行した外国のことを思い出していた。私の趣味は海外旅行だ。若い頃から一人でよく行った。夫とは一度も海外旅行はしたことがない。彼は飛行機が嫌いなのだ。それでも、私が一人で旅行するのを止めたりはしない。

結婚したのは私が四十歳で、彼が五十歳だった。約十年の結婚生活。私は独身生活が長く、自由奔放に生きてきた。

水商売を続けてきたけれど、自分の店は持たなかった。縛られるものは持ちたくなかったのだ。また海外旅行ができるだろうか、と考えていると、

「由紀さん」

と、私を呼ぶ声がある。足を止めて振り返ると、ホームの職員がこちらに向かって来る。息を切らせながら近くに来ると、

「由紀さん、宮本さんと親しかったでしょ？」

と言った。

「ええ。辞めてしまって淋しいわ」

「宮本さん、夕べ交通事故で亡くなったのよ」

私は自分の耳を疑った。

力が抜けて日傘が飛んでいった。

「交通事故……」

私は、それだけ言うと、その場に座り込んだ。私の心は、その衝撃に追いついていなかった。

太夫に魂を持ち逃げされた浄瑠璃人形のように、ぐったりとして顔を膝の上に押し付けていた。その間、どのくらいの時間が過ぎたのだろう。

気がつくとホームの医務室のベッドに横になっていた。そこは、エアコンで快適な温度に保たれていた。書棚のガラス扉に映る窓の木々は、蝉時雨の中にあった。

「気がついたのね。」

看護師さんが近寄ってきた。

「私どうしたのかしら」

「由紀さんは、海岸で軽い熱中症にかかったんですよ」

窓に目をやると、木の幹に空蟬が貼り付いていた。そのそばで、まだ命あるものたちは声を限りに鳴き出した。

私の頭の中は明子さんのことでいっぱいだった。それを、蟬の声がかき消そうとしている。明子さんに会いたかった。必要なことはそれだけだった。

職員の人が、明子さんのご葬儀に行くか、と訊いてきたが、私は行かないことにした。最後のお別れができないのは残念だけど、亮くんが暮らしていた家に行くなんて出来ない。彼の奥さんに会うなんて出来ない。

一緒に青春のページを飾った亮くんは私だけのもの。私はその亮くんだけでいい。

明子さんの魂が導いてくれたのかも知れないけど、ごめんなさい。

きょうは、ホームから水族館に行くバスが出るので、気分転換に参加することにした。あれから私は風邪を拗らし数日、熱に浮かされていた。もう平熱に戻り、それを証明するかのようになり、元氣よくバスに飛び乗った。

熱の中で、私は明子さんとの邂逅を果たした。彼女は私の手を取り、あの学校の上空を飛んだ。

「ほら、由紀さんの学校よ」

彼女は言う。

本当だ！ 校庭も見える。あの西側の窓があるところが私の教室だったのよ。私の青春、私は叫ぶ。なにかもが煌めいている。あの日のままだ。私は泣くべきだった。だが涙は頑として出ない。阿鼻叫喚できたらこの苦しみを、洗い流してくれるに違いないと思う。泣くことより辛いのは、泣けないことだった。ただ、溶けない氷が心の中にあるだけ。

病葉の堆積が排水溝のパイプから、一気に流れ出し広い海原へと解放されたら、私も解放されるだろうか。広い海へ流れ着いたら、病葉も物の数ではない。喜びと苦しみが入り混じり、大声で叫びたい心境だった。だが、叫べない。やはり頑として叫べない。胸が張り裂けそうに痛くなった。そして目覚めた。

水族館は、バスで十分くらいの距離だった。

ホームでは毎日、何かしらのレクリエーションが計画されているのだが、私はお花見以来の参加だった。

海の近くの水族館でイルカショーを見ていた。跳ね上がったイルカに水を掛けられ、

海は見ていた

靴が濡れたが気にしなかった。意表をつく出来事は楽しかった。そんな気分は久しぶりだった。クラゲ館に入ると、幻想的なブルーのライトアップに目を奪われた。

白いクラゲが長い足を何本も延ばして、水を蹴っている。その水槽に人影が動いた。それは、こっちを向いた。円い水槽に湛えられた水の向こうから亮くんが手を振った。

私は後を追った。見失って気が付くと浜辺に出ていた。

その時、風風の彼方へ亮くんは、私を誘った。